

ベンガルの土人形とインダス文明

外川 昌彦

広島大学大学院国際協力研究科

インドの村で暮らしていた頃、家に遊びに来ていたバグディ・カーストの娘たちが遊んでいた、手作りの人形を見せてもらった。

手の中にひんやりと感じる小さな人形は、池の岸の泥を練り上げて作られた、村の娘たちが遊ぶ土作りの人形だった。素朴な風合いとやさしい肌ざわり、腰の曲線のたおやかにくびれを見ていると、つい手放したくなくなるような温もりがあった。

「かわいい人形だね。他にはないのかい。」

と聞くと、村の娘は、なんでこんな物を見たいの、といった風に少し照れながら話してくれた。

「こんなのいくらでもあるのに。ジュマは人形作りが得意なの。ジュマに言えば、すぐに作ってくれるわよ。」

その土人形は、いたって簡単な作りであった。

泥を棒状に丸めて胴体にし、二本の手と腰のくびれを入れて身体の形を整えると、それに木の枝で、目や口を付ければ出来上がりである。日陰に干すと強度が増して、ひんやりとした手触りと手の中の重さが心地よい、すぐにままと遊びが出来そうな人形になる。

娘たちは互いに作ったばかりの人形を持ち寄ると、大きな菩提樹の木の下で、そのでき具合を競ったり、できそこないを笑ったりして遊んでいた。

木の根の露出した段違いの窪みを家に見たてると、小さな水溜りを家のそばの池にして、小さな箱庭のような村を作っていた。

そこには、泥をこねて作ったお膳の魚やご飯もならべられ、必ず摘んだばかりの真っ赤なハイビスカスや白いシウリの花が飾られる。祭壇でもないのに、いつも色とりどりの鮮やかな花で飾られるのが、いかにもヒन्दウー教徒の子供たちの遊びのようで、いつまでも心に残る風景だった。

しっとりとした感触の人形を手で包んでいるうちに、これはどこかで見たことのある形だと思いをめぐらせた。というのも、インダス文明で知られるハラッパー・モヘンジョダロの遺跡から発掘されるテラコッタの塑像が、この人形といかにも共通した印象を持っているのである。

素焼きの塑像と村の土人形とではその製法に違いはあるけれど、優美なくびれを持つ腰の曲線や口を半開きにしたとぼけた表情には、独特の素朴な味わいが共有されていた。その造形には、民族文化の創造力が生み出した不思議な様式美が象られているように思われ、人間の身体が持つ特徴と土くれが「人がた」に見られるために必要な最低限の条件という、人びとが長年にわたり培ってきた造形への美学が、素朴な人形にも刻み込まれているように感じられたのである。

こんな人形を、娘たちは誰に教わるのでもなく、村の空き地でお姉さんたちの遊びを見ているうちに、自然に作るようになっていた。今から100年以上も前に、このベンガルの農村地帯

を訪れた岡倉天心が、村のバザールで見つけた素焼きの壺に魅せられて、すっかりその造形に夢中になったというのも、うなずける話に思われた。

翌日、ジュマが持ってきてくれた人形は、どれもとぼけた素朴な可笑しさが漂っていた。ジュマは、まるで家事をするお母さんのように粘土の固まりを手にとると、するするとそれを丸い棒状に伸ばして、たちまちもうひとつの人形を作ってくれた。手にぴたりと吸い付く生き物のような土の動きを見ていたら、土を大切にし、家もカマドもすべて土から形作る、ベンガルの人々の土との深い関わりが思い起こされた。

目の前で人形にこね上げられた粘土の頭に、最後にジュマは、小さなシウリの花を挿して渡してくれた。